

昭和36年3月卒業

第 31 期

昭和34年秋季～35年夏季



チーム紹介

上位打線に長打力

ことしの能高ナインには目立つ選手がいない。それでいて5勝3敗1引き分けの好成績。

これは、ナインのファイトによるものだ。エース坂本は得意のドロップとカーブをおりまぜたピッチングで、調子がよければ他校勢も簡単には打ち込めまい。打線は宮腰、坂本、藤原のクリーン・アップ・トリオは確実に長打力を持っているが下位がやや弱いのが気になる。守備もこれといった穴はない。ただ内野手の肩が弱いのが気になる程度。

ファイターの太田監督（明治出）がコーチしてからチームカラーも“上品”なひよわさから、ファイトのあるチームに成長してきた。だから先取点を取り、調子に乗れば相手チームにとっては手ごわい存在。

どんなにリードされても、試合を捨てないねばりを身につけてきた。

◎昭和34年

・秋季県北

能代6－1十和田

能代□－□花岡工（スコア不明）

◎昭和35年

・春季県北

能代4－1花輪

能代2－5能代商

・能代選抜

能代1－5経大付

・全県大会

能代6－3秋田市立

能代10－0花輪

能代2－13秋田商

秋田商	4	5	2	0	0	0	2			13
能代	0	2	0	0	0	0	0			2

（秋田商）今川・長岐一成田

（能代）坂本－藤原忠

〈部長〉小笠原恒太郎

〈監督〉松谷 儀朗・太田 久

〈部員〉3年生

◎坂本 正夫

沢田石正直

田中 勝俊

田中 士郎

塚本 英夫

能代、花輪を大破

坂本好投 ノーヒットノーラン

（秋田魁新報 昭35.7.24より）

▽2回戦

花輪	0	0	0	0	0	0	0
能代	1	4	3	2	×	×	10

花輪打線は能代坂本の高めの速球に手を出しては凡退をくり返し、5回までわずかに四球の走者を1人出したのみ、二塁を踏むものもなく終わった。



高校野球から得たもの

田 中 士 郎

私が高校野球に明け暮れた、昭和33年4月からの3年間は、正に青春そのものでした。あれから40数年が経ち、記憶も薄れて曖昧な点が多々ありますが、野球を通して得た貴重な体験・経験は、後の自分の進路や生きざまに大きな影響を及ぼしたと思っています。このような思いから、今でも大切にしているものが幾つかあります。

一つには、色褪せた毛糸のサポーター。

練習中、右肩に激痛が走ってボールをほとんど投げることが出来なくなり、その回復策としては、医師の治療と、練習の帰りに銭湯で温湿布療法を施すことでありました。そして肩と肘を冷えから防ぐため、母が編んでくれたもので、今でも大事に保存しています。

二つには、ところどころ摺り切れたウインドブレーカー。通気性が良いので、寒い時のゴルフのアンダーウェアとして今もお世話になっています。

三つには、木製のバット。高校卒業以来ずっとそばに置き、時々素振りに付き合わせている大切な一品です。

四つには、昭和35年の第42回全国高校野球大会・県予選出場の参加賞。甲子園を目指した唯一の記念品で、日頃から机の上に置き、文鎮の役目を果たしてもらっている。

最後は、人生のうちで最も多感な時代に、野球を通して良き先輩達に出会えたことである。

野球部の活動を物心両面から支えてくれた諸先輩や部長先生達で、とりわけ、現会長の太田さんが昭和34年の冬に監督に就任されて、新進気鋭の青年監督は部員数僅か20名そこそこの弱いチームに、情熱を注いで明治大学流の厳しい野球を指導して下さったことです。

さらには、今日に比べて運動用器具が充分でなかったあの当時、練習の仕方にいろいろと工夫を凝らし、例えば、吹雪く海辺での足腰の鍛錬、夜遅くまで体育館でテニスボールやバドミントンの

羽根を使ったバッティング練習、それまで経験したことのない様々なストレッチ体操の導入等でした。技術的なことは猛練習によって、身体で覚えさせるという徹底した指導方針で、これが部員の野球に対する考え方、取り組み方を一変させ、いわゆる太田イズムのスタートでありました。それだけに練習は非常にきつく、夜遅く、吹雪で足跡もない道路を一步一步足で探りながら家へ帰ったことや、夏、周りが暗くて水路に自転車ごと突っ込んだこと等が懐かしく思い出されます。

監督から最初に指導を受けた我々同期生は、走・攻・守にずば抜けた野球センスをもっていた坂本正夫君。小柄だがファイトの塊で1年生からレギュラーであった塚本英夫君（働き盛りで逝ってしまい残念です）。右肘に故障を抱えながらも整然とした持論を展開していた沢田石正直君。いつもニコニコし、洒落を言っては仲間を笑わせていた田中勝俊君。それに私の5人だけでした。

我々同期生の高校野球最後の試合は、昭和35年7月甲子園大会・県予選の準々決勝、相手は秋田商校。その春の選抜甲子園大会で雪国旋風を起こしたチームで、私は何とかヒット1本打ったものの、結果は、残念ながら11対3くらいのスコアで燃え尽きた。そして夏の甲子園大会のテレビ放送には、見向きもしなかったことを妙に覚えている。

やがて、仲間はそれぞれの道に進み、私は上の学校を経て福島県庁に入り、技術畑を学んで来た中で、高校野球の猛練習で培った負けじ魂や忍耐力、さらには後輩達の甲子園での目覚ましい活躍等が心の拠り所、励みとなり、仕事のうえで大変プラスになったと思っている。

終わりに、最近母校の野球は停滞気味のようにですが、「野球は能代高校」と言われるくらい強い復活を現役の諸君に期待し、OBの一員として惜しみない応援をして行きたいと思ってる。

——松陵会の益々の発展を祈念致します——



当時のユニフォーム



部室前にて



チーム紹介

相手にこわい長距離打線

エース小山がヒジの故障で春は不振だったが、小山が復調してきたのでチーム力はグンと変わってきている。シュート、カーブ、アウドロと頭腦的ピッチングなので打者にはいやな存在。今までエースの役を果たしてきた正統派の佐藤、これをリードする捕手谷内はインサイドワークがよく、このバッテリーはそうとうな威力を発揮するだろう。リードオフマンの秋山は毎試合2つの盗塁を記録しており、出塁したらうるさい存在。熊谷は長打力を秘めチャンスに強い。宮腰は今まで3本のホームーを記録している。4番の藤原（峰）は打率3割7分で調子にのれば恐ろしい。藤原（忠）とともにチーム全体のけん引車。つづく成田はどんな球でも打ちこなし、打線は下位でも気をゆるせない。

問題は守備。一、二塁、ライトなどが気がかり、それでも最近ではチーム全体が盛り上がり、練習を続けているので期待してよさそうだ。

◎昭和35年

・秋季県北

能代1－0花岡工

能代7－5大館鳳鳴

決 勝 能代8－0鷹巣農

・全県選抜

能代1－9秋田

◎昭和36年

・春季県北

能代3－0十和田

能代4－5花岡工

・能代選抜

能代2－4秋田市立

・全県大会

能代5－4増田

能代5－2本荘

能代1－0十和田（延長18回）

準決勝 能代0－9秋田

能 代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
秋 田	3	0	0	0	1	0	1	4	×	9

（能代）簾内－藤原忠

〈部長〉小笠原恒太郎

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

◎藤原 忠男 宮腰 義和

秋山 昭夫 米川 秀芳

鈴木(佐藤)隆三 袴田 時男

藤原 峰男

青春の樽子山

宮 腰 義 和

その日も一台のオートバイが血相を変えてグラウンドにすべり込んで来た。昭和34年、桜も終わり初夏の風がアンダーシャツにやさしい時期であった。現在の文化会館後方にあった当校のグラウンド。土手ぎわには桜の老木が見ごとに立ち並び、観桜もけっこう出来る野球場であった。

オートバイからおりた人、松谷監督は開口一番、コラッ！の一日が始まる。40人ほどの野球部員は一斉に緊張の一瞬となりそれぞれの動きを見せていたのである。

新入生の私達は誰もが球拾いに夢中であり、その球拾いが楽しみのひとときでもあった。バックネットの上から飛び出たボールは後方の小さな庭園（豊澤市長宅）に入り、そのボールを拾うのに行くことに意義があった。

市長さんの庭には花やくだものがいろいろあってボールを拾いながらイチゴやトマトなどで喉を潤すのが目的であり、口を拭いてグラウンドに戻ることがしばしばであった。そのころ、伝統のあるユニホーム（試合用）が新人の私にも配られた。15着という貴重なものである。風呂敷に包んで大事に持ち帰り両親に見せて床の間に飾ったものでした。

翌日、弘前へ遠征となった。その弘前では1年生の私に松谷監督はリードオフマンの指令を出したのです。硬球を手にして約1ヶ月だというのに。うれしかった。

6月下旬には能代選抜が待っている。毎日が暑さとの戦いが続いた。そして7月には全国大会県

予選。秋の新人戦と時は流れ、やがて冬の陣冬期練習に入る。そんなある日突然知らされたことは監督が変わるということであった。我々には初めての人、太田久監督である。明治大学出身のバリバリだ。なにをやるにも本格的でこわい感じの監督ということだけ覚えている。

やがて2年になる。春の合宿が始まった。朝5時起床、お決まりのメニューを消化せねばならない。その為か日中の練習時、それなりの疲労が現れていたものだろう。ケガ人が絶えず地獄の特訓そのものである。そこにはプロ野球の練習場の様に大勢のファンもなく、数人の老人が退屈そうにタバコをくわえて見ているだけである。

公式戦も終えて夏休みに入ればあの炎天下のもとで1周300mのグラウンドを10周、それにダイヤモンドを廻るベースランニングと息の詰まる苛酷な数週間。そして秋風の漂う頃には県北大会が鷹巣で行われた。その日の太陽はやけに眩しくて、高くあがったフライが太陽の中に入り捕球困難になるというハプニングで苦しんだ。その時私のそばに寄って来て、オイッこれを使えと渡されたのがサングラスである。当時高校野球でのサングラス使用は聞いたことがなかったと記憶している。この試合グラスを掛けてのフライは1球だけであった。今思えばかなりの余裕があったものだと感じている。これ迄の2年間は無我夢中で毎日走り続けて来たものです。

やがて3年目のシーズンが訪れる。この年、昭和36年、3年生に投手がおらず各試合には出場するも黒星が多く散々な成績が続いた。それでも夏の県大会は来る。投手のいないチームを見捨てなかった2年の小山、1年の簾内の両名である。彼等の力投でBブロック決勝まで勝ち進むことが出来た。秋田高校との決勝戦は見事に敗れ、3年間の高校野球にピリオドが打たれた。八橋球場夏の陣、長い闘いの幕ぎれはあまりにもむなしく涙の一粒も落ちなかったのは俺だけだったのだろうか。こんな私達の高校野球時代は血と汗と涙の連続と言ったらいいすぎだろうか。

昭和38年3月卒業

第 33 期

昭和36年秋季～37年夏季



チーム紹介 太田久監督談

ナインが一日ごとに調子をあげてきているので楽しみだ。春季全県大会の対秋田高戦、能代選抜での対経大付戦など前半相手を押していながら勝利を逃したが、これは強気の作戦が災いしたためだ。投手陣は、簾内、小山が安定してきたし佐藤も使えるので十分。問題は打力だ。過去の試合では下位打者が案外点をとっていたが、上位打者がもっと確実さを取り戻すとおもしろい。しかし谷内を軸に熊谷、岩井に当たりが出てきたので打力も期待できるようになってきたのは心強い。守備は一・二塁間がやや弱いがまずまず。若い選手が多く試合の雰囲気のにまれる危険が多いので、実力を十分出しきれるような精神面の鍛錬に重点をおいている。

◎昭和36年

・秋季県北

能代2－1 鷹巣農

能代4－1 花岡工

決 勝 能代5－0 能代工

・全県選抜

能代1－2 秋田商

◎昭和37年

・春季県北

能代2－1 鷹巣農

能代5－2 十和田

決 勝 能代7－2 大館鳳鳴
(9年ぶり2回目の優勝)

・全県選抜

能代3－4 秋田

・能代選抜

能代1－2 経大付

・全県大会

能代0－1 横手工 (延長13回)

能 代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
横手工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	

(能 代) 簾内－谷内

(横手工) 三浦－三栗谷

〈部長〉小笠原恒太郎

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

◎小山 泰夫

